

日本語における曖昧さ  
—語用論からの—考察—

パトリシア プトリ アユ レスタリ  
0442031

マラナターキリスト教大学  
文学部日本語学科  
バンドン  
2008

## 序論

言葉は人間がコミュニケーションをする際の媒体である。つまり、言葉は、人が言おうとする意味を理解するための手段である。コミュニケーションをする際、誤解が生じ、相手が言おうとする意図が伝わらない場合もある。これらは、語、文が多義を持つ場合に生じうるのである。また、聞き手の解釈違い、話し手の明瞭でない、発言により生じる場合もある。

つまり、これは言葉の曖昧さにより生じるのである。曖昧とは何であるかを見てみよう。

曖昧『「曖」も「昧」も暗い意』  
手順が確立していなかったり、規模がはっきりしていなかったりして、明確さを欠く様子。（ずるさやごまかしを否んでいる場合に言うことが多い。例「態度が～だ」）「～な表現：～模糊」⇔明確、明瞭。  
(新明解国語辞典、1989:五)

語、文、談話を理解するためには、それを構成するすべての要素を掴む必要がある。つまり、文、文脈、場面、聞き手と話し手の理解度を理解する必要があるのである。

ある会話または談話を研究分析する場合、語用論をもってするのが最も適切だと思う。したがって、本論文ではアプローチとして語用論を使うことにする。

本論文で挙げる課題としては、次の二つである。

1. 日本語における曖昧とは何か。

2. 曖昧さが生じる原因は何か。

## 本論

まず、語用論について調べてみる。

武（1999）は、語用論には三つの要素が含まれている。

- 1) 話し手の意図であるとする
- 2) 聞き手の解釈であるとする
- 3) 両者の相互行為により生ずるものとする

上記の理論に基づき、以下の例を分析してみる。分析の際は、語そのもの、文、会話全体を対象とする。

パンティーという語を聞いて場合、会話の場面を知らない人は、すぐ「女の子がはくパンティー」だと思ってしまうだろう。上の語は、カフェにおいて発される語であり、「女の子がはくパンティー」とは無関係の語である。ここで話し手の言うパンティーは、「パン」と「ティー」である。したがって、聞き手が話し手の言うそれが理解しなければ、誤訳が生じることになる。

「きたないからさわっちゃだめ！」この文を聞いてなら、「“それ”がきたないから、だめ！」と人がありますよ。でも、「あなたの手がきたないから、だめ！」と言う意味もある。聞き手が話し手の言う意味は分かっている。でも、聞き手が話し手の言うものは違います。

## 結論

1. 日本語における曖昧さは、さまざまな要因によって生じる。
2. それらの要因としては次のようなものがある。
  - イ. 同状況における異解釈。
  - ロ. 同解釈における意状況（場面）。
  - ハ. 異状況における異解釈。
  - ニ. 同状況同解釈であるが、対象となるものが異なっている。